
ようこそ！！大和探偵事務所へ！

星空の侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ！！大和探偵事務所へ！

【Nコード】

N1409X

【作者名】

星空の侍

【あらすじ】

とある世界があつた…。その世界では『科学』と『魔術』が長くに渡って争っていた。時は流れ、二つの勢力は共存に向かつていった。

科学の総本山・『学園都市』にその『探偵事務所』はある。この物語はその『探偵事務所』の三人の所員たちの物語。

あなたのお悩みを解決します！！

ハートフル・アグレッシブル・ハイテンション・探偵？ストーリー
！！

不定期更新です、また、パクリも多いのでそれが嫌だという方は
見ないほうがいいです。

第1話・雷・嵐：役立たずの雨？（前書き）

この小説は『とある魔術の禁書目録』の世界観を元にしていますが、全てが同じではありません。（例 上条当麻が登場しない・警備員や風紀委員がないなど…）
また、ジャンプネタやライダーネタなどの『パクリ』も多いので、それが嫌な方は見ないほうがいいです。

以上の事が大丈夫という方は稚拙な文ですがどうぞ。

第1話・雷・嵐…役立たずの雨？

「それ以上、近付くんじゃねえ！コイツがどうなってもいいのか！
!?!」

学園都市…、かつて第三次世界大戦を引き起こし、世界を『支配』しようとする『アレキスター・クロウリー』が作りだした最先端の科学技術が集まる都市。

といつても、現在この都市は大きな変化を遂げているが…、その話は今は置いておこう。

ここは、学園都市の中でも一、二を争う巨大銀行
その玄関前の円型の広場。

現在、ここでは、ボサボサの黒髪を無造作に腰まで伸ばし、目をめまぐるしく動かした顔にまるで生気のない男が小学校低学年ほどの少女を抱え込み、その顔にナイフを突き付けていた。

そんな男の足元には札束でパンパンに膨らんだバッグがあり、周囲には武装した警察に取り囲まれていた…。

…だが、警察は少女を盾にされ、身動きが取れない…。

「おらあ!!!とつとと退きやがれええ!!!さつさとしねえと、
コイツに真っ赤なりボンを飾っちまうぞ!!!」

「ッ!!! ツヒ!!!ウ……ヒグ……!」

少女の頬からナイフの刃が少し当たり、血が僅かに滲む…。

だが、少女は必死に涙を堪える。

その姿はあまりにも痛々しかった…。

『お…落ち着け!!これ以上、罪を重ねるな!!』

「うるせええ!!!退かねえってんならああああああああ
!!!!!!!」

男は叫びながら、ナイフを振り上げる
!!

「ッ!!!」

思わず、少女は目を堅く閉じる。

バチンンン!!!

「ガアアアアア!!!!!????」

「!?!…え…?」

凄まじい音と男の苦悶に満ちた叫びに少女が目を開けると、男が仰向けで倒れ、気絶していた。

その男の額からは血が流れ、その近くの地面には淡く発光している小石が転がっていた。

『か…確保オオオオオオ!!!』

一瞬の静寂の後、弾かれたように武装した警察官たちが気絶した男に向かっていく…。

「みちる!!!」

「お…お母さん…!!う…うああああああんんん!!!

「！」

少女の母親が警察官の人波を掻き分けて、少女の所まで駆けつけるときつく少女を抱き締める。

少女もようやく、緊張から解き放たれた為、声を出して泣きだした。

「…良かったね。もう離しちゃ駄目だよ。」

そんな、喧騒を背にその少女は歩き出した。

輝くような金色の髪は肩ぐらいの長さであり、癖っ毛なのか所々が跳ねていた。

着ている服は真っ白い半袖シャツにその上から緑色の半袖のサファリジャケット、下はゆったりとした緑の半ズボンという男の子のよくな格好だ。

だが、それとは対照的にその顔は間違いなく美少女と称されても過言ではないほど可愛らしかった。

(…とりあえず、さっきの男で最後ね…。…にしても、やっぱり、厄介だわ…。 『P4』)

少女は眉を寄せながら、一枚の紙を見つめる。

その紙には複数の人物名が書かれており、その紙の一番上にはこう書かれていた。

『P4』 購入者リスト

「 チェック・メイト……。」

青色のジャージを着た銀髪ロングで黒縁眼鏡の少女がそう言いながら、指でキングの駒を弾く。

コロコロと、『キング』は力無く、盤上に沈んだ。

シャンデリアが頭上で輝く広い部屋。
現在、この部屋にいるのは、その眼鏡少女とチェスの盤を挟んで座っている真っ白い髪をオールバックにしてサングラスをかけた初老の男。

以降の『』は英語だと思ってください。

『ば…馬鹿な…。この私が……負けた…？』

男は余程、チェスに自信があったのだろう。茫然としている…。

『さて、約束通り…、この館にいる子供たちを解放してもらいます』

『よ。』
『……図に乗るなよ……!! 餓鬼が…!!』

パチン…!!

男が指を鳴らすと、ドタドタと部屋に5、6人の黒スーツでサングラスの男たちが現れる。

『私の実験の素晴らしい成果だ…!! お前のような小娘など一瞬で

次の瞬間、子猫は少女の右手の手甲ガントレットに変わった…！

「……嵐の旋律」
ストームダンスアロー

「……こんな……ば……か……な……」

男は目の前の光景に立ちつくす事しかできなかった。

「……ガ……ア……ア……」

「……ウ……ア……ア……ア……」

キメラ達は全員、倒れていた。

「……これで、本当の意味の……」

男の目の前にいる少女はまるで弓で矢を撃つような構えをしている。

否、……ようなではない……。よく目を凝らすと、手前に突き出さ
れている手甲からは弓の弦のように風が集まっていた。

「チェックメイトです。」

ビュウンー！

ブシュウウウ……！！

「」

男の胸から血が噴き出し、男は声もなく、倒れた

……。

「つかれた ……！！！！」

ボフト、金髪の少女はソファにダイブする。

「お疲れ様。」

銀髪ロングの眼鏡少女がコーヒーの入ったカップを金髪少女に渡す。

「ありがとう！リョカ！ そついえばさ。」

「？、何、零？」

「今回、コイツは何もしなかったよね？」

零と呼ばれた少女が指差した先には寝袋に包まれて眠りこけている

第1話・雷・嵐…役立たずの雨? (後書き)

星空の侍・ とまあ、こんな感じで第1話終了です。

???・ ちょっと待ってください!! 私、また蚊帳の外ですか!
? というか、名前が!?

星空の侍・ こっちの小説ではまだお前は登場してすらいないからな。まあ、『幻想郷の星空』を読んでいる読者さんにはお前が誰か分かると思うが…。安心していいよ。こっちではお前もレギュラーキャラだから。

???・ よ…良かった…。

星空の侍・ まあ、事件関係の話なったらめっきり出番減るけどな。

???・ ……………orz

宗次郎・ ZZZZZZ…次回も…よろしく…… ZZZZ

第2話・ 探偵だけで飯が食えるほど世の中は甘くない(前書き)

星空の侍・ 始まりました。今回から3、4話程度は零たちの日常を描きたいと思います。

零・ 今回は朝の風景だよ！

リョカ・ それでは始まります！

第2話・ 探偵だけで飯が食えるほど世の中は甘くない

ジリリリリリリ!!!

学園都市第八区の二階建てのビルの一室から、けたたましい音が響く。

「んん…!!…朝か ……」

現在の時刻・AM4:00

大和探偵事務所所員の一人、零こと天野零の朝は早い…。

「フンフンフン」

鼻歌を口ずさみながら零は淡い黄色のパジャマを脱いでいく。

「零。ちよつといい？」

コンコンと、控えめなノックと共にリョカの声。

この事務所には現在、零を始め、リョカことリョカ・スピリット、宗次郎こと水鏡宗次郎が暮らしており一人につき一部屋が宛がわれている。

ちなみに、余談だがこの事務所の所長である『大和将』の部屋は現在、彼が行方不明の為、掃除などはリョカがしている。

「うん、いいよ。」

零は上半身のパジャマのボタンを外しながら、返事をする。

「零、新聞配達のついでにこの手紙を　　　　って！！れれ…零！
！／／／前を隠して…！／／／」

「え　　？別にいいじゃん。私とリヨカの仲なんだし。」

「『親しき仲にも礼儀あり』なんだよ！！もう…、少しくらい、恥
じらいつてものを…／／／」

「はいはい…、分かったよ。」

零は生返事をしながら、もぞもぞといつもと同じ白のＴシャツに着
替えた。

「…あれ　　…??？」

のだが、零は首を傾げながら、シャツをパタパタとやっている。

「？、どうしたの？」

「いや　　…、最近、なんだか、シャツが窮屈でさあ…。特に
胸の部分が…。」

「！！！！、む…ね…?？」

リヨカは思わず、零の胸の部分を凝視する。

いつもはジャケットで隠れていた零の胸は確かにそれなりの膨らみ
が見て取れた。

(…あ…あれ…？いつの間に、こんなに成長を…？あれ…？私と零
って同年…。一緒に住んでいて、食べている物だって同じ…。

な…なら！！私の胸だって　　！！！！)

零の言う通り、この時間帯から歩いている人間は居らず、しかも、この区域は自動車などの乗り物が侵入禁止となっている為、ちよつとしたゴーストタウンの装いである。

ニヤア…!!

「…猫!!」

零はただの人間ではない。

その正体は半分は人間だが、半分は神という『神血』と呼ばれる存在。

神血はただの人間とは違い、生まれつき、高い身体能力と頭脳を持っている。

故に、今のように普通の人間なら聞き逃してしまう音も聞きとる事ができるのだ。

「…こつちだ!!」

零は目を輝かせて、猫の方向に向かう。

「ニヤア…?」

「うわああああ…!!…!!…!!ここは桃源郷なんだね…!!…!!そうなんだね…!!」

物影に隠れながら、見つめる零の視線の先には路地裏の行き止まりで数十匹の猫が屯っていた。

(ふわああああ……!!!!顔洗っているよ……、可愛いなあ……。よし……!!!!いくぞ!!!!存分にもふもふするんだ!!!!)

零はそんな事を思いながら、ジャケットのポケットから、マタタビと猫缶を取り出し猫たちに近づいていく……。

「ね……猫ちゃん?こ……怖くないよ……?ただ、少しだけ、お腹をもふらせて欲しいなあ……なんて……。」

「フシヤアアアアアアア!!!!!!!!!!」

猫たちは一斉に近づいた零に向かって威嚇をすると、蜘蛛の子を散らしたように一匹残らず零の横をすり抜けて逃げ出してしまった……。

「……………ハア……やっぱり駄目か……………」

零はがつくりと頂垂れてしまう。

先ほども話したように零は『神血』……、更に詳しく言えば、彼女は電気系の神血である。

電気系は体から特殊な電磁波を発生させてしまう。

どんなに完璧に力を制御できたとしても、完全に消し去る事はできないのだ……。

動物はその微弱な電磁波に反応し、怯える……。

結論から言ってしまうえば、零は動物にとことん嫌われる体質だという事だ……。

無類の動物好きなのである……。

「一度でいいから、動物を撫でたいな……………」

零は普段の明るい様子とは打って変わり、寂しそうに自分の手の平を見つめていた。

……ヤ……ニ……ヤ……

「！、…今…声が……」

零はそのまま、さつきまで猫たちがいたゴミ袋の山に近づいていく。

ニヤア…ニヤ……

「！、また聞こえた…。」

さつきよりもはっきりと聞こえた声、だが、なんだかその声はとても弱弱しかった…。

「猫ちゃん？どこ？」

零はその声に一抹の不安を感じながら、ゴミ袋を次々に退かしていく。

「……………ニヤ…ヤ…ヤ……」

「……」

ある程度のゴミ袋を退かし終わると、そこには弱弱しく鳴く白い毛並みの子猫がいた。

(なんか、すごく弱っている…。怪我は…ないけど…。
あ、何かの病気…?) じゃ

「のんびり考えている場合じゃない…!!」

AM5:15

「ス …、ス …」

その少女は規則正しい寝息を立て、ベッドで眠っていた。
栗色の髪をロングにしており、顔は少しあどけなさが残っているが、
間違いなく美少女の類に入るだろう。

ドタドタドタ!!

「ユウキ …!!」

バキイイインン!!

階段を駆け上がる音の後、声と共に扉が吹き飛ぶ。

「きゃあああ!!???な…?な…?なに!!??なに!!??」

少女は跳び起き、パニックになる…。

まあ、朝っぱらから自分の部屋のドアをブチ壊されたら誰でもそうなるに決まっているが…。

そんな少女の前に

「ユウキ!!この子を助けて!!」

「れ…零ちゃん?そんなに慌ててどうし…!!」

ユウキと呼ばれた少女・龍神優姫の言葉は途中で止まる、零の腕の中で弱弱しく震えている子猫を見たからだ。

カチャ…カチャ…カチャ…。

ここは大和探偵事務所の地下室…、様々な工具が置かれ、まるでどこかの工房を思わせる。

「出来た…!!」

そう言ったリヨカの手には金属製の銀色に輝くボールペンのような物が握られていた。

「…これが少しは零の力になってくれればいいけど…。ふわああ…。」

リヨカはそう言いながら、可愛らしい欠伸を漏らす。

「……時々さ、リヨカって、とんでもない事するよな……。」

そう言う宗次郎の顎はちよつと赤くなっている。

「……何？なにか文句があるのかな？」

リヨカは満面の笑顔でアルコールランプを持っている。

「すまん……！俺が悪かったから……！それ仕舞ってえええ……！！」
（駄目だ……！今のリヨカに逆らったら殺される……！）

「……それよりも、名前だろ……！」

「……いい名前、何かある？さっき聞いてなかったみたいだけど……。」

リヨカの後半の言葉は凄まじく黒いオーラを纏って放たれた……。

「……（汗）、そ……そうだな……、なら……、
はどうだ？」

「……、……いいね、それ……！うん……！！すごいよ……！！」

リヨカは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「そ……そうか……、そりゃ良かった……。」

（セエエエエエエフウウウウ……！！マジで良かったアアア……！！ここでコイツの機嫌を損ねたらそれこそ何されるか……！！）

「……ちと……。」

リヨカはそう言いながら、宗次郎の寝袋に潜り込む。

「ちょ！？それ、俺のー!!」

「いいでしょ、別に……、徹夜で疲れたの……、学校行く時間になったら起こして……」

そう言い終わると同時にリヨカは微かに寝息を立て始めた。

「……………、まあ……しょうがねえか……。」

宗次郎はそう言いながら、コーヒーでも飲むかと、一人ごちて立ち上がった。

優姫の部屋には光が満ちていた。

(相変わらず、綺麗だな……。)

零の視線の先には子猫を抱いた優姫が居り、その両手には光が灯り、子猫はその光に包まれていた。

その姿は本当に神々しく、どこか神秘性に満ちている。

「うん……。これで大丈夫。」

光が収まると

「ニヤア!」

弱っていた子猫は優姫の腕の中で元気な声をあげた。

「良かった…!!」

零はその様子を見て笑顔を浮かべた。

「ありがとう!!優姫!!」

「どういたしまして。さて、それじゃあ、起きようかな。」

「え…?まだ時間じゃないよ?」

現在の時刻・AM5:30。

零の言う通り、まだ学校に行くまでは時間がある。

「いや…、この惨状のままじゃ…ね?」

「……あ……。」

優姫が困ったような顔で先ほど、零が粉々に砕いたドアだったモノを見ている。

そして、その残骸は部屋中に飛び散り、とてもじゃないが寝ていられる現状ではない…。

「……ごめん!!!急いでいたから…!!!」

零はあわあわしながら必死で謝る。

そんな、零に優姫は、

「大丈夫だよ。怒ってなんていないから。」

ナデナデと零の頭を撫で優しく笑いかける優姫。

「零ちゃんはこの子を助ける為に頑張ったんだから、気にしなくていいんだよ。」

「　　ありがとう、ユウキ…！」

零はギョウと、優姫に抱きつき、満面の笑顔を浮かべていた。

第2話・探偵だけで飯が食えるほど世の中は甘くない（後書き）

星空の侍・ とまあ、今回の話で分かってもらえたと思いますが、それぞれの三人の役割は次の通りです。

・零……：肉体労働専門、今回の新聞配達以外にも様々なバイトをかけるもちしている。

・リョカ……：武器などの発明。

・宗次郎……：自宅警備員ニート

宗次郎・ ……俺だけおかしくねえ…？

星空の侍・ 次回は学校の話です！零・リョカ・宗次郎と優姫の学校生活が明らかに！？

宗次郎・ 無視ツスカ……。まあ、いいツスケど……。次回もよろしくです。

第3話・ 伝説と謳われるには訳がある（前書き）

星空の侍・ 今回の話で、第二次世界大戦の英雄たちが続々登場します！

天野零・ それはいいんだけどさ 。その話を詰め込んだ所為で私たちの出番減ってない？

星空の侍・ 第3話スタートです！！！！

天野零・ 逃げたな…。

第3話・伝説と謳われるには訳がある

じりじりと太陽が砂の大地を照らす…。
ここはとある国の砂漠地帯　　。

「ハア…ハア…ハア…」

その男は弱弱しく息を吐きながら、砂の大地に倒れていた。
着ている服は全てボロボロで服に所々、空いた穴から覗く体は骨が
浮かび上がるほど痩せ細っており、衰弱しているのは目に見えてい
た。

(死ぬのか…。俺…)

男は自分の視界が擦れていくのを感じながら、死を自覚する…。

(…駄目だ…!!まだ…!!まだ…死ねない…死ねない…!!)

ブロロロロロロ…!!

「!」

男の耳に車の音が聞こえる。

(く…糞…!!もう追手が…!!)

男は焦るが、弱り切った体は動くはずもなく、男は這って少しでも距離を取るうとする。

たとえば、それが気休めにしかならなくても…。

ブロロロロロ…、ガチャ…。

そうこうしている内に男の近くで車は停まりドアが開くと、そこからサングラスをかけた黒服たちが降りてくる。

『手間かけさせやがって…。』

『とつとと連れて帰って休もうぜ。』

『同感だな…。あまり時間を食うと研究者どもが五月蠅い。』

黒服たちは口々にそんな事を言いながら、倒れた男を取り囲んでいく。

『なあ、コイツの足、潰しておかねえか？また逃げられても厄介だろ？』

一人の黒服がそう言いながら、懐から黒光りした…拳銃を取り出した。

『…ただぶつ放したいだけだろ。まあ、別に止めはしないが…』

『いいのか？貴重なサンプルなんだろう？』

『構わないさ。抵抗が激しかったから仕方なかったでもいいええな。』

その会話はとても、一人の人間に対する言葉とは到底思えない…。

『へへ…。じゃあ、遠慮なくいくぜ…！』

黒服の男は本当に嬉しそうに銃口を倒れている男の左足に向ける。

『くっ…糞……!!』

男は自分の無力さ、情けなさに涙が溢れる。

『喰らえ…!!』

パン！パン！

砂漠に銃声が響いた。

チ　　ン……!!

（おはよう、美哉お姉ちゃん。）

龍神優姫は仏壇の前で手を合わせていた。

優姫の視線の先には写真があり、そこには今の優姫をそのまま小さくしたような容姿の少女が笑顔で写っている。

彼女の名前は『龍神美哉』、優姫の双子の姉であり、生前は今なお、伝説として語られる、第三次世界大戦を終わらせた『新世代』と呼ばれる子供たちの一人だった。

(…お姉ちゃん…。和樹くんも行方が分からなくなっちゃったんだ…。)

優姫は目を閉じながら、心の中で姉に話し掛ける。

優姫の言う『和樹』というのは、優姫の幼馴染みであり現在行方が分からなくなっている『大和将』の幼馴染みの青年である。

彼も最近、行方が分からなくなってしまったのだ。

いや、彼だけではない。その一週間ほど前には同じく、将と幼馴染みの少女・『御武アスカ』も行方不明になっているのだ…。

果たして、これはただの偶然なのだろうか…？

(大丈夫だよね…？お姉ちゃん…。大和くんたちだもん…。)

そう自分に言い聞かせながらも優姫の心には不安が渦巻いていた…。

(お願い…、お姉ちゃん…、大和くん達を護って…!!)

ギユ…!

「!?!、……文香さん…。」

優姫の手を優しく掴んだのは、黒い髪を腰まで伸ばした女性、立風^{たちか}文香^{ぶんか}だった。

「大丈夫…。あの子たちはアナタを悲しませる事だけはしないわ。」

優しい黒い瞳が優姫を真っ直ぐに見つめる。

その瞳を見ていると、不思議と不安が安らいでいく…。

「……はい。」

「ご飯食べましょうか。零ちゃん達が待っているから。」
「はい、文香さん…。」ご心配をおかけしてすいません…。」

優姫は申し訳なさそうに立ちあがった文香に頭を下げる。

「気にしないでいいのよ、そんな事。私達は家族なんだから。」

「というか、私としてはもっと頼ってほしいわ。まあ、皆はしっかりしているし、私は頼りないから仕方ないのかもしれないけどね。」

文香は困ったように笑いながら、優姫の頭を軽く撫でる。

「頼りないなんて、そんな事ないです…！文香さんはいつも優しく、大人で、私の憧れです…！」

優姫は心の底からそう思う。

「憧れって、ちょっと照れるわね…。／＼／＼… それじゃあ、お母さん』って呼んでくれる？」

「え！？い…いえ…、それは…、というか、文香さんはとても若々しくて…』お母さん』って感じじゃ…。」

そうなのである…。

文香は三十代らしいのだが、その外見は18、9歳と名乗ってもまるで違和感がないほど若々しいのだ。

「若くなんてないわよ、私なんてもうおばさんよ。」

「文香さんがおばさんなら、世の三十代の女性たちはなんなんですよ。」

か、化石ツスか？」

そんな声と共にやって来たのは宗次郎だった。

「ごめんね、宗次郎くん。お腹すいたわよね？すぐにご飯にするから。」

「いや、別に催促に来たわけじゃないツスよ。ただ、零の腹の虫のオーケストラが五月蠅くて避難してきただけです。」

「…悪い事しちゃったわね。それじゃあ、行きましようか？」

「はい。」

「おかわり！！！」

零は口の周りを米粒まみれにして、満面の笑顔で井ぶりを文香に差します。

「はいはい、ちょっと待っててね。大盛りでいい？」

「もちろん！！！」

零の力強い言葉に文香は優しい笑みを浮かべながら、

「その前に、零ちゃん。」

「何？文香さ　　わぶ…！！？」

文香は優しく零の口元をハンカチで拭く。

「はい、綺麗になった」

「ん、ありがとう、文香さん」

まるで、本物の親子のような微笑ましい光景である。

「というか、零…そんなに食べたなら太るよ…?」

カシャ…。

零の手からポロリと箸が落ちた…。

「ふふふふ…太ってなななんかなないよよ…!!!ま
まままったく!!!リヨリヨリヨカカカカカは何を言っているのかな
!?!かな!?!」

「……………太ったんだね……………」

「!!!、何故それを!!!?」

「いや…、バレバレだろ……………」

宗次郎の心底、呆れた声に零はテーブルに突っ伏してしまう…。

「違う…違うんだよ…。これは成長期…成長期だから……………」

零は突っ伏したまま、ブツブツと言葉を漏らす。

「おい…、なんか、零のダークゾーンに触れちゃったみたいだぞ…。

というか、見た目太ったように見えないけど一体どれくらい
太ったんだ?」

「……………、2?」

「……………は?2?ぐらいどうってこと」

「乙女の2?増は男の20?増と同等なんだよ!!!」

「…そう思うなら、ご飯を文香さんから受け取るな…。」
呆れたような口調の宗次郎の視線の先には山盛りのご飯が盛られた茶碗を文香さんから受け取る零…。

「は！？いつの間にな！？」

どうやら、ほぼ条件反射らしい…。

ウ

ウ

ウ

！！！！！！

けたたましいサイレンの音が鉦山に響く。

「おし！！オメエらアアア！！！！！！昼だぞオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

黄色のヘルメットを被り、鶴嘴を持った灰色の髪で無精髭を生やした男がそう叫ぶ。

「はい！親方！！」

「おっしやあ！！飯だ！飯

！！！！」

親方と呼ばれた男の呼び掛けに男たちがぞろぞろと鉦山の中から出てくる。

「相変わらず、鉄心の親方は琥珀ちゃん大好きツスねえ…。」
「……（コクコク）」
「いいじゃねえか。家族が笑い合える事がなによりさ。」

12、3位の少年の言葉に小柄なヘルメットを被り片手にカンテラを持っていて少女がコクコクと頷き、二十代ぐらいの青年が微妙に笑みを零す。

「そりゃあそうなんですけどね。この姿からは親方があの伝説の『新世代』の一人とはとても思えないツスよねえ…。」

「ハハハ…、まあな…。」

『鉄騎竜』、それがこの男・金山鉄心の通り名である。

彼は第三次世界大戦時、魔術軍・七番隊・鉄騎隊隊長を若干12歳で務め、千の軍勢をたった一人で壊滅させたとまで言われる。だが少年の言う通り、今の娘にデレデレの姿からはそんな感じは微塵も感じられない。

「わ、たかい、たかい」

「アナタ、お手紙が来ていましたよ。」

「おう、奏、すまねえな。」

琥珀を肩車している鉄心に白い髪を胸ぐらいままで伸ばした女性が封筒を差し出す。

彼女の名は『金山奏』、名字からも分かるように鉄心の妻である。

「さて、誰から　　つて、須佐さん？あの人を手紙なんて珍しいな。」

鉄心はそう言いながら、封筒を開け手紙を読み始める。

「……………、そうか……。もう、そんな時期なんだな。」

「アナタ？」

「はは？」

「……………悪い、奏、琥珀……………それから、皆。しばらく、俺はここを留守にする。」

そう言う鉄心が持つ手紙には『S級魔術師試験試験官要請』と書かれていた。

「よし、身支度準備完了」

「いや、駄目でしょう。」

満面の笑顔の零にすかさずリョカが突っ込む。

解説しよう、現在の零の格好は上は学校指定のブレザー姿なのだが、下が普段履いている短パンのままなのである。

もちろん、突っ込んだリョカはキッチンとチェック柄のスカートを履いている。

「うっ……………、スカートって嫌いなんだよ……………。なんかス

ス……………するしさあ……………蹴りとかしたらパンツ丸見えじゃん。」

そもそも、普通の小学生女子が思い切り蹴りを繰り返す時があるの

だろうか？

(いや…零なら、ないとは断言できないなあ…。)

そうなのである。天野零という少女はとりあえず考えるよりも先に体が動くタイプだ。

街中で悪質ナンパや弱い者いじめを見かけると問答無用でドロップキックを繰り出すほどである。

「でも、前まではそんな事あんまり、気にしてなかったよね？」

「いや…、流石に私ももうすぐ12歳だしさ、人前でパンツ丸出しはそろそろ卒業しなきゃと思ひまして…。／＼／」

そう言う零の顔はちょっと赤い…。

そんな表情を見ながら、リヨカは、

(零ってやっぱり可愛い…。)

零は普段、男の子のような格好と快活な言動であまり意識されないが、顔は間違いなく美少女の部類に入るし、こんな風に時折見せる恥ずかしがる姿はとても可愛らしいのだ。

「それなら、短パンの上にスカートを履けばいいんじゃない？」

「……おお！！なるほど！！流石、リヨカ！！ちよつと待って！準備してくる！！ あれ？そういえば、宗は？」

「ちようど、さっき、眠りモードになってね…。ちよつと目を離れた隙にどこかに行っちゃったんだよ…。」

リヨカは、ハアと溜息を洩らす。

「前に居なくなつた時は、沖縄に行つてたんだよね…。」

「出先で目が覚めない事を願うばかりだよ…。」

寝ている時の宗次郎はまるで瞬間移動の能力を持っているかのよう
に遠い地に短時間で移動できるのだが、起きている時の宗次郎は普
通なのでリヨカの言う通り、行きついた先で目を覚ませば、確実に
遭難するのだ…。

「ごめん、二人共、お待たせ。」

「「優姫」」

そう言つて現れたのは高校の制服姿の優姫。

だが、低身長＋童顔の彼女が高校の制服を着ているのは明らかにミ
スマッチである。 一部分を除いてだが…。

(…や…やつぱり、お…大きい…。)

リヨカの視線は優姫の胸、豊かな膨らみに向けられる。

そして、次に自分の胸に …、

「orz」

「ど…どうしたの？リヨカちゃん、お腹でも痛い…？」

突然、蹲ったりリヨカに優姫は心配そうに声をかける。

「いえ…、大丈夫です…。大丈夫ですよ…。まだ成長期ですもん…
…これから大きくなりますもん…。」

「え…えつと…零ちゃん、なんかリヨカちゃんの様子がおかしいん
だけど…？」

「そうなんだよね、今日の朝からなんか変でさ…。」

「…どうせ…私の気持ちなんて…優姫さんや零には分かんないで

銃声が鳴ってからしばらく立つがいくら時間が経っても一向に痛みは襲って来ない…。

代わりに男の耳に聞こえたのは

『な…なんだ！？こりゃあ！？ぎゃああああああああ』

』

『うおおおおおおお！！！！？？？？』

『がああああああああ！！！！！！！！！！』

黒服たちの悲鳴だった…。

(…なにが…？)

男は恐る恐る目を開けると、そこには

『随分と悪趣味な事してるじゃないか。』

『き…貴様は…！！』

そこには、地面から生えた木に縛られている黒服たちと緑の髪の少年がいた。

(それから後はあつという間だったな。)

緑の髪の少年は黒服たちからこの研究所を聞きだし、たった一人で殴り込み、たった一人で壊滅させてしまった…。

「…まだ君たちみたいなのがいてるなんてね。」

緑の髪の少年は木に…いや正確には巨大な木の枝に絡まれ身動きがとれなくなっている白衣の男達に睨みながら話しかける。

「まさか…、ここまでの強さとは……『新世代』^{ネオ}など、ただの誇張された与太話だと思っただけがな……。」

拘束されている内の一人、サングラスをかけている男が弱弱しい声で呟くように喋る。

「与太話だとしたらどうして、あの戦争から10年も経った今でもボクたちは伝説として語り継がれているのさ？　まあ、そんな話は今はどうでもいいんだよ、単刀直入に聞こうか。君達のバツクにいるのは誰だ？」

ギチギチギチ…と、少年が言葉が言い終わると共に男の体を木の枝が締め付ける。

「……ッ……！！……射楯陽介^{いたてようすけ}、貴様…どこまで知っている…？」

「全く知らないから君に聞いてるんだけど？悪いけど、ボクは他の新世代^{ネオ}と違って優しくはないからね。とっとと口割らないと

殺すぞ

「……！！！」

見た目はただの小学生のような外見…、ただ発せられた殺気は長年裏の仕事をしてきた男でさえ息が止まるほどの重圧だった。

脅しや虚勢ではない…、逆らえば逃れようのない『死』が待っている。

『…わ…分かった…！！言う…！！だから…！！…助けてくれええ

ええ 』

「 簡単に口割ってんじゃないわよ…。」

「 !! 」

ブシューウウウ!!!

「 は…? あ…れ…? 」

突然、聞こえた声と同時に拘束されている男の首筋から血が噴き出す。

男は突然の出来事に自分が血を噴き出している事にさえ気付けない。その疑問の声が男の最後の言葉だった…。

男は最後の時まで自分が…そう…斬られた事を認識できぬままその生涯に幕を降ろした。

「 …… なんて… 」

陽介は知っている…。

斬った相手が認識する暇さえ与えないほどの鋭すぎる斬撃を放つ少女を、

「 なんて殺した!!! アリア …… !!!!!!! 」

陽介の叫んだ先、そこにはいた。

金色の長髪を赤いリボンで一房横に束ね、白い筒袖に紅い袴姿で腰に二本の刀を差した少女が。かつて、第三次世界大戦において魔術軍六番隊として参加し、その戦いぶりから、『神速剣』と恐れ

船の先端で釣り糸を垂らしていた宗次郎はそんな間の抜けた声と共に巨大な黒鮪を釣り上げていた…。

第3話・伝説と謳われるには訳がある（後書き）

リヨカリヨカの解説コーナー！！

リヨカ・こんにちは、皆さん。リヨカ・スピリットです。このコーナーでは本編に出てきた用語を詳しく解説するコーナーです。今回のワードは

・新世代^{ネオ}

リヨカ・新世代^{ネオ}とは今から10年前に起こった第三次世界大戦で活躍し、同戦争を終結させた魔術軍の上は14、5歳から下は6、7歳の子供たち全十二隊の部隊のそれぞれの十二人の隊長たちを指して使われる呼称です。

それまでの常識を悉く覆すほどの実力をそれぞれが有していた為、新しい世界の代表者たちという意味が込められています。そして、10年の歳月が流れた現在でも、彼らは『生きる伝説』として私達の世界で語り継がれているんです。

リヨカ・まあ、新世代^{ネオ}の意味は概、こんな感じですね。次回の後書きでは、『新世代^{ネオ}』の十二人の隊長たち全員の二つ名を発表しようと思います！

天野零・次回もよろしく

第4話・神速剣(前書き)

星空の侍・ というわけでタイトル通り、陽介VSアリアが今回のメインです！

天野零・ また出番が少ないぞ !!!!!!

リョカ・ 零はまだいいでしょ…。私なんて…。

星空の侍・ はいはい、ここは前書きだからあんまり内容喋らないでね。

宗次郎・ zzzzzz…第4話始まります… zzzz

第4話・神速剣

「どうして殺したか…ですって？情報漏洩は避けるべきでしょ。」

神速剣・立風アリアはただ淡々と言葉を紡ぐ。

その口調は殺す事が当然であり、それ以外の選択肢はないという確固たるモノだった。

(同じ『新世代』でもここまで違うのか…。)

男はアリアの言葉にゾツとしながら、自分を助けてくれた緑の髪の少年の背中を見る。

この少年は優しい…。

(まあ…、さっきの時はちょっと怖かったけど…)

男が思うさつきとは、研究者を脅した時だ……。見た目は小学生のような外見からは想像もつかないような威圧感と殺気…。

だが、本当に血も涙もない人間なら、骨の一本や二本折っているだろう…本来、必要なのは情報だけで、ソイツの生死などはどうでもいいはずなのだから…。

(だけど…、この女は違う…！)

この目の前の女はなんの戸惑いもなく、仲間(だと予測できる)を斬り殺した。

しかも、斬った後もまるで感情が感じられない。
普通はどんな人間でも人を殺せばなにかしらの反応を示すモノだ…。
後悔・嘆き・絶望・愉悦…だが、この目の前の女にはそれが無い。
一切の『無』表情。
それとも、この目の前の女はそんな感情も忘れるほどの数の人間を
殺してきたというのだろうか…。
今のように。

「……ボク達の誓いを忘れたのか、アリア…。」

陽介はアリアを見つめる…、髪と同じ緑の瞳は悲しみに満ちていた。

「……………」

アリアはなにも語らない…。
代わりに持っていた刀を鞘に納める。

「……」

ドン！ドン！

「な…何が…？」

男は一瞬すぎて何がなにか分からなかった…。
突然、陽介がいる場所に砂柱が上がったのだ…。そう思うのは無理
もない…。

「本気なんだね…アリア…。」

「！？」

男は慌てて声のした隣を見る、そこにはいつの間にか陽介が片膝をつき右頬からは血を流し座っていた。だが、その姿はさっきまでとは違う…。

「……君が本当にボク達の誓いを違えるというなら……ボクは……」

いや、正確には姿ではない…、その雰囲気は今までとは違う…!!

「お前を殺す……!!」

「!!」

そう言う陽介の目はさっきまでの悲しみに満ちたモノではなく、鋭く敵を睨みつけるモノだった。

常人…といっても、今まで違法で非道な研究を受け続け、多くの人の皮を被った外道を多く見てきた男はそれでも恐怖した…。この殺気は先刻、研究者の男に向けたモノの比ではない……。だが、そんな殺気を一心に受けてもアリアは眉一つ動かさない。

「……お前が私を殺す……?」

「ッ!!」

ドン…ドン!!…ドン!!…!!

アリアがそう言い終わると同時に再び、陽介の周りで砂が無数に舞う。

陽介はそれをかわしつつ、アリアに迫る。

(また…!? 一体、何が…!?)

男には何が起きているか、まるで理解できない。

いや、この現象が恐らく、彼女の攻撃である事は先ほどの陽介の言葉や彼女の言葉が言い終わった時に起こったという事でおおよそ予測できる、にわかには信じがたい事だが…。

アリアはただ佇んでいるだけでなにかの動作をしているようには見えない。

(そう言えば、聞いた事がある『神速剣』の斬撃は目にも止まらぬほどの速さだと……)

(…相変わらず、なんて斬撃だ……！)

駆けながら、陽介はアリアから一瞬たりとも目を離さない、否、離せない。 。

駆けている間にも、彼女の斬撃は的確に正確に陽介の足を潰すべく放たれていく。 。

陽介はそれをなんとか躲しながら、ポケットから小豆ほどの大きさの種を取り出し、それをアリアの足元に投げる。

大樹の芽吹き(ガイア・フォース)

「……………」

一瞬でアリアの足元に落ちた種は一気に芽吹き、瞬く間に巨大な木となりアリアを拘束する。

対するアリアはまるで微動だにしない。

「やった！捕まえた！」

男はそれを見て陽介の勝利を確信する。

彼がそう思うのも当然かもしれない、アリアが拘束された木は全長数百メートルはあるであろう巨大さと人間数十人分ほどの太さを併せ持つほどのスケールを誇っている。いくら、彼女の斬撃が鋭いといってもこんな巨大なモノは一瞬では斬れないだろう。

「…………ハア…ハア…ハ…………」

だが、陽介の表情は厳しい…。

「…なんだ…。」

アリアはポツリと呟く。

「…やっぱり、この程度なの…。」

「…な…!?!?」

心底、つまらなそうにアリアはそう言う。

ズズズズズズズズ……………

巨大な木の幹の表面に無数の線ができ、そして

ドゴンンンンンンンンンンン!!……………!!

凄まじい巨大さを誇っていた木がまるで豆腐のようにバラバラになり、砂の大地に沈んだ…。

「…………この程度で私を殺すとはよく言ったものね…。」

「ハア…ハア…やっぱりこの程度じゃ駄目か…。それにしても、前にも増して斬撃の鋭さが増しているね……。」

戦況は完全にアリアの独壇場だった。

息を乱し汗を掻く陽介とは対照的にアリアは汗どころか息一つ乱していない…。

その光景に男は違和感を感じる。

(なんで、こんなに一方的なんだ…?)

これでアリアの相手がただの魔術師や神血ならこの展開は理解できる。

それほどまでに『新世代^{ネオ}』とは別次元の強さを持つ者たちなのだ。

だが、今、アリアと対峙しているのは同じ『新世代^{ネオ}』の『大地の申し子』・射楯陽介なのだ。

ここまで一方的な展開に疑問を覚えるのはいたって当然の事だったが、その疑問はすぐに解かれる事となる。

「…いつまで…そんな姿で戦うつもり…?」

アリアは相変わらずの無表情だが、その瞳には明らかかな怒りがあつた。

(そんな姿…?)

「……………」

シードバルカン
種弾丸!!!

陽介はそのアリアの言葉に答えず左手の甲に5、6粒の種を乗せると指でそれを弾き、アリアに攻撃する。
もちろん、そんな攻撃は動作が一切見えないアリアの斬撃により、全ての種が斬り裂かれ地に落ちる。
と、同時に ……、

ドゴ ンン！ドゴ ンンン！！ドゴ ンンン！！
「！？」

落ちた無数の種が爆発を起こし、アリアは爆煙に吞まれる。

「爆煙花」
ばくえんか

そして、陽介も爆煙の中に消える。

「く…！！」

男は爆発の風圧に巻き込まれながら、体勢を低くし、衝撃に耐える。

「ヨウスケ！！」

「大丈夫…、ボクはこの程度じゃ死なないよ。」

煙が晴れるとそこには、木に護られた陽介がいた。
だが、アリアの姿がそこにはなかった…。

「…やったのか…?」

男は言いながら、陽介に近づいていく。

だが、陽介は首を振り、遙か前方に視線を向ける。

まさかと思いつながら、男は陽介の視線を辿る、そこには黒い点のようなモノが……。

「あの一瞬であそこまで移動したって言うのか…!?!」

「……まあ…今のボクの実力では動かすのが精一杯って所かな…。」

「動かす…?」

陽介の言葉の意味が最初は分からなかった男だが、さっきまでの二人の戦いを思い出し、すぐに気付く。

(奴はさっきまでまるで動いていない…!?!)

そう…。アリアは陽介との戦闘が始まってから、全く動いていないのだ…。

あれほどのスピードがあるのだ、チマチマと抜刀の斬撃などの遠距離攻撃に頼らなくても直接攻撃をすればいい話だ。それを今までやらなかったという事は ……

(加減してるって事か…!?!)

「あれが『神速剣』だよ。君は今の内に逃げるんだ。」

「な…!?!?何を…!?!」

「……悔しいけど、今のボクじゃアリアには勝てない。恐らく、ア

「イツはボクを殺した後、君の事も殺すだろう…。」
「……………」

男は何も言う事ができなかった。
彼の言い分は100%正しい…。

そして、自分の命を護りたいなら彼の言う通りにするのが最善なのだ。

そう…最善……なのだ…。

「……………ける…な……………」

「?、どうしたんだ?早く逃げるんだ。」

俯いた自分の事を本当に心配そうに見る陽介。

その顔には自分が置いていかれる事に対する怒りも恐れもまるでなかった。

「ふざけんなよ…!!」

「!?!」

突然の怒りを孕んだ男の声に陽介は目を丸くする。

「なんで、お前はそうやって自分一人で抱え込もうとしてんだ!確かに俺は役立たずだよ…、お前たちの戦闘にはついていけねえよ…!!でもな…!!それがお前を…恩人を見殺しにする理由になんてなるわけねえだろ…!!俺だって戦う…!!お前を護る…!!」
「!?!」

陽介はハッとする。

そう、自分は彼を護るつもりが彼に重荷を背負わせようとしていた

のだ。

確かに今ここで自分が犠牲になれば彼は助かるだろう……。だが、その後、彼はずっと自分を見捨てた事に罪悪感を持って生きていかなければならなくなる……。

(そんな事にも気付かないなんて……)

いつの間にかこんな悲観的で自己犠牲的な精神になってしまったのだろうか？

フツと彼だったらどうするだろうか？と考える。

どんな力も打ち消し、どんな相手にも手を差し出す、あの強い目をした彼なら、

(決まってる。彼なら……将なら……、目の前の彼も助けて自分も絶対に死なない道を選ぶ……!!)

「大丈夫だよ……。ボクは大丈夫だから……。早く逃げるんだ……。」

「お前……!!まだ、そんな事を……!!」

「違うよ。」

「……ッ……!!」

そう言う陽介の表情はさっきまでのどこか諦めたようなものではなく、しっかりとした強い意志を感じられるものだった。

「ボクは死なない。だから、君は振り向かないで逃げるんだ。いいね……?」

「……絶対、生き残れよ。」

男は走る。陽介の言った通りに振り向かずに

「無駄な事を。」
「！！！」

バツと陽介は体勢を低くする。

いつの間にか陽介の後ろにはアリアが立っており、陽介の頭を狙って、刀を振るつたのだ。

例によって、その動作はまるで見えないが……。

陽介は低い体勢のまま振り向きざまに裏拳をアリアに放つ、だが、その拳は空を切つたのみだ。

(くそ……！！やはり速い……！！速過ぎる……！！)

陽介は心の中で悪態をつきながら、視線を忙しなく動かし、アリアの姿を追う。

この戦いは一瞬でもアリアの姿を見落とせば即座に『死』が待ちうけている。

「言っただけ……そんな姿で……そんな仮の姿で私を殺せるわけない……。」

(上……！！)

陽介は頭上を見上げる、そこには刀を振り上げたアリアの姿があった。

刀の刀身が日光を反射し、銀の光が鋭く輝く。

ガクと、自分の視界がブレた。

「！！！」

(いつの間に……！！)

陽介の両足の脛には細い細い針が刺さっていた。

「どうして、今まで気付かなかったのかって顔ね。」

アリアはゆっくりと落下する。

(駄目だ…！足が動かない…！！)

陽介は懐から種が無数に入った小瓶を取り出し、地面に落とす。

「悪いけど、答える義理はないわ…。それと…」

パリンと瓶が割れ、種は急成長しすぐに無数の巨木となり陽介を護る。

(これが今のボクの最大防御…！！いくらアリアでもこれを潰すには数分はかかるはず…！！)

「私はまだ一度たりとも、技は使っていないわよ。」

(…！！、な…に…？)

「少しだけ、本気を見せてあげるわ。」

』

』

振り下ろされた銀の刃は全てを斬り裂き、緑の少年の体からは夥おびただしい赤が噴き上がった。

「あまのれいって奴はどいつだアアアアア!!!!!!」

ここは学園都市にあるとある小学校。

現在、いつも通りに登校している子供たちにスキンヘッドにサングラスをかけ崩した学ランを着たいかにも不良といった感じの大男がそう叫ぶ。

そして、そんな男の後ろにはくすんだ金や青色の髪をした男たちがいた。

恐らく仲間だろう。

「な…なに…?」「こ…こわい…」「せ…せんせい…」

「大丈夫だ!みんな大人しくしていなさい!」

ざわざわと子供たちが騒ぎ出す。

そんな子供たちを制し、校門の近くに立っていた先生が男たちに近づいていく。

「君たち、こんな朝早くからウチになんの用なのかな?見た所、学

生のようだが？」

「あん？先公か、ちょうどーいい。この学校にあまのれいって奴がいるはずだ。とっととソイツを出しな！」

「…確かに彼女はこの学校に在籍しているが…彼女に君たちがなんの用なのかな？」

「ゴチャゴチャうるせえ！！とっととソイツを出せってんだ！！」

不良は先生の胸倉を掴む。

バチン！！

「ぎゃ……！！？」

だが、その手はすぐに離される。

離された不良の手の甲は真っ赤になっており、その足元には小石が転がっていた。

「私になんか用なの？」

男達が一斉に声のした方向を見る。

そこには、金色の髪の少女・天野零がいた。

「テメエがあまのれいか…！」

「？、何？アンタなんて知らないんだけど？」

零は首を傾げる、こんなスキンヘッドの大男の知り合いなぞいない。

一方、零の方はまるで平然とした様子で拳を握り締める。

「歯食い縛りなさいよ。」

いい歳こいて…人様に迷惑かけんな

「!!!!!!」

「が…!? ああああああああああああああああああああ

……………」

2メートルは超える大男がまるで車に轢かれたように吹き飛んだ。

「……」

……………」

残された男達は茫然となった後、ダラダラと冷や汗を流し始める…。

「さて、教育的指導といこうか？」

そこには、青白い電気を纏った…まさしく…雷の神という言葉がピッタリの少女が立っていた。

第4話・神速剣（後書き）

教えて！！リヨカリヨカ！！

リヨカ・今回は新世代^{ネオ}さん達の二つ名、一挙公開です！！

1 番隊隊長・ 『滅亡を呼ぶ黒き月』 第三次にて戦死

2 番隊隊長・ 『天上の炎帝』

3 番隊隊長・ 『医学の天才』

4 番隊隊長・ 『氷雪剣士』

5 番隊隊長・ 『星の代弁者』 第三次にて戦死

6 番隊隊長・ 『神速剣』 第三次後消息不明

7 番隊隊長・ 『鉄騎竜』

8 番隊隊長・ 『大地の申し子』

9 番隊隊長・ 『結界神』

10 番隊隊長・ 『拳神』 第三次にて戦死

11 番隊隊長・ 『槍王』

12 番隊隊長・ 『狂気の探査者』 第三次後消息不明

リョカ・ 第三次世界大戦において死んでしまった方も多くいます。ちなみに彼らのお墓はある特殊な島にあるんです。まあ、この島については追々、本編で明かされていきます。それでは、次回もよろしく願います。

第5話・優しさゆえに人は狂う（前書き）

星空の侍・ 今回のお話はアリアの心情がメインなのですが、今の段階ではよく分からないと思います。

天野零・ 完璧な伏線回ってわけね。

星空の侍・ まあそんな所です。それと、今回のお話では『幻想郷の星空』の過去修行篇に出てきた『あの人』も出ます。覚えている人いるかな…？

天野零・ 全てはアンタの更新スピートの遅さが原因だけどね。

星空の侍・ …… 土下座

天野零・ 無言で土下座！！？？？

龍神優姫・ 第5話スタートです。

第5話・優しさゆえに人は狂う

「……本当にいいの…？陽くん？」

「……ああ……。構わない。」

ここは美しく広い海が見渡せるとある島の丘の上。

俺、射楯陽介はそう言う薄紫色の髪をロングにした碓準はなまじゅんに静かに頷き返す。

「…これからも今回のような事が起こるかもしれない…。」

俺はそう言いながら、視線をあいっ……大和将に向ける。

混じり気のない黒い髪に黒のスーツの将は一つの墓標の前で俺たちに背を向け佇んでいる。

その背中はとて小さく、今にも壊れそうに俺には見えた。

「……一体、いつまで……この世界は私たちを利用するんだろうね……。」

準のその問いに俺は答える事ができなかった。

その準の声には深い悲しみと明確な怒りがあったからだ。

「……準……馬鹿な事を考えるなよ。」

「大丈夫だよ、彼が…しーくんが耐えているのに、私たちが耐えな
い訳にはいかないじゃない。」

準は将の背中を見ながら静かにそう言う。

「そうだ。あいつが…大和将が…俺たちの光が…この世界を見限らないかぎり、俺たちも耐える…。耐える事ができる…。」

「悪い、待たせたな。」

そう言いながら、将は俺たちの元に来る。

その目には相変わらず、強い意志の光が宿っている。

「源竜さんとの話は終わったのか？」

「…一方的にだけどな…。謝ってきた。」

「……そうか…。…将、ちょっと話がある。」

「？、なんだ？」

「俺はこの島に自分の力を封印しようと思う。」

(……あの頃の夢を見るなんて……)

陽介は目を覚ます。

アリアの一閃を受けた肩口は裂け、大量の血が流れている……。
激痛などというレベルではない。

少しでも気を抜けば意識が再び闇に堕ちるほどの感覚　。

(……骨ごと真つ二つにされてるな……左半身は言う事を効かない……)

「……驚いた……、さっきので確実に殺したと思ったんだけどね。」

「……お……驚いたなら……少しは……驚いた顔……しなよ……。」

陽介の言う通り、『驚いた』と発言しながら、アリアの表情は相も
変わらず『無』表情だった。

「まだ、そんな軽口が聞けるなんてね……。」

あの島

を護る事がそんなに大事……？」

「……当たり前でしょ……、君はあの事件を忘れたのか……？」

「……忘れるわけじゃないでしょう……。」

「！」

そう言うアリアの顔は明らかかな怒りで彩られていた。

「　私はこの世界を許さない……。どうして、アンタたちは
平気でいられるの？あの第三次だって、結局、全て仕組みられたモノ
だった……。あの事件……『黄泉還り』の時にはあの子たちの亡骸まで
利用された……。」

静かな炎はメラメラと燃え、言葉と共に燃え上がっていく、『憎し

み』という名の燃料を糧に ……。

「許せないでしょう!!!？私は許さない!!!神様面して美哉達を殺した『科学』も!!!私達を騙し利用し陥れた『魔術』も!!!この世界の全てを私は許さない!!!」

憎しみを怒りを世界にぶつけるようにアリアは叫ぶ。

「でも、何よりも許せないのは、アンタたちよ!!!」

アリアの憎悪の視線は陽介に向く。

「あんな島を 美哉達の亡骸を 自分たちの力を割いてまでも女々しく護り続け…この腐った世界に牙を剥こうともせず…逆にこんな世界を受け入れ護ろうとしている…!!!」

「……なら、君は…美哉達の亡骸があのような時に利用されてもいいって言うの…?」

陽介が言う『あの時』とは、『黄泉還り』と呼ばれる大事件の事である。

この事件に関してはまた後に語るとしよう。

「そもそも前提が間違っているわよ、私なら亡骸なんて残しておかない…。切り刻んで、灰同然にして、海に捨てるわ。」

「!!!、……本気で言っているのか…?」

陽介にはその言葉が立風アリアの言葉とは思えない…。

第三次の頃の彼女は確かに今のように口数は少ないが、それでも仲間思いな面も確かにあった少女だった。

「……まさか……。貴女が来るとは……。」
「弟子が間違った道に進もうとしているのを止めるのも師匠の務めだからな。」

アリアの後ろには、陽介を抱えた黒い髪をショートにし、この砂漠とは不釣り合いのジャンパーを着た女性が立っていた。

「……刀子……さん……？……なんで……？」

「喋らなくていい。もう少し我慢してな。すぐに紫乃が来る。」

「紫乃も……いるのか……」

「敵を前にして、無駄話とは余裕ですね……。」

「……！、刀子……！！！」

言葉と同時に、アリアは一瞬で刀子と呼ばれた女性の背後を取り、神速の突きを刀子に放つ　　！！
対する刀子はまだ振りかえってすらいない。

パキインンンンン

「まあ、実際、余裕だからね。」

刀子は振り向きもしなかった。

刀子は手刀でアリアの刀を折ったのだ。

「……流石ですね……これも中々の名剣だったのですが……」

「よく言うね……。まだ本気じゃないだろう？まだ、アンタは自分の業物を抜いていないじゃないか。」

そう言いながら、振り返る刀子の視線はアリアの腰に帯刀されたままの刀に向いている。

「貴女と今はやり合うつもりはありません。先の一撃で貴女と私の実力がまだまだ拮抗していない事は火を見るより明らかですから……ここは逃げさせてもらいます……」

「言っただけけど？弟子の間違いを正すのも師匠の務めだと……」

刀子はそう言いながら、拳を握り締める。

「傲慢にもなりませんけど……」

アリアは折れた刀を投げ捨て、自分の腰に差しているもう一本に手をかける。

「逃げるのは得意です。」

瞬間、アリアの居た場所に巨大な砂柱があがる。

それは、太陽の光を覆うほどの大きさだったが、刀子が軽く手刀で雑ぐと、一瞬で砂柱は崩壊し、砂は散り散りになった。

だが、もうすでにそこにはアリアはいなかった……。

「……逃げたか……。」

「刀子さん!!」

「紫乃、陽介がまずい……、治療を……。」

やって来たのは、紫の髪を腰まで伸ばし白衣を着た少女
。

「!!、陽介……!!まだ意識はある?」

「……ああ……まだ……生きてるよ……。」

紫乃の問いかけに陽介は弱弱しいながらも言葉を返す。

「……酷いわね……。骨まで真つ二つになっている……。まずは応急処置を……。」

紫乃は懐から銀のケースを取り出し治療を開始する。

「……アリアと少しだけど、戦ったよ。」

「……そうですか……。」

紫乃はそう言ったただけだった……。

この少女・櫛名紫乃くしなしのと立風アリアたちかせは親友と呼ばれるほど仲が良かった。

その少ない言葉にはどれほどの思いがあるのだろうか。

「刀子さん、陽介を連れて先に町の病院に行ってください。私の名前を出せば恐らく協力してもらえと思うので……。」

「分かった。」

アリアは陽介に2、3本の注射をし、刀子にそう指示をする。
刀子はその言葉を受け、すぐに姿を消す。

「……アリア……、貴女はもう……私たちの知っている優しい貴女じゃないの……？ 貴女は一体、何をしようとしているの……？」

紫乃のその問いに勿論、誰も答える者はいなかった……。

「……足りない……。」

アリアは走りながら呟く。

静かに呟くその言葉だが、その表情は怒りに満ちている。
だが、それは刀子……御剣刀子みよこさに対する怒りというよりも、

（なに？このザマは？立風アリア？敵前逃亡とは……。情けない……！
！足りないんだ、アンタは……！）

「……そうだ……足りない……！」

（もつとよ……！もつともつともつともつともつともつともつともつともつと強くツツツツ……！私はもつと強くなる……！）

不思議だ。心にはこれほどの激情と渴きが渦巻いているのに頭の中はどこまでも冷静だった。

改めて理解する……。

「ああ……、やっぱり私はとっくの昔に壊れている……。」

ならば、何も恐れる事などない。

全てを呑み込み、全てを喰らってやろう。

ブブブと、無機質なバイブ音が響く。

『随分と情けないものだな、アリア』

『……煩いわよ……』 『、そもそも、アンタの部下の情報隠蔽能力が低いから、陽介に大切な施設の一つをみすみす破壊されたんでしょ。』

『別に大切じゃない』

『は？』

『そもそも、彼らは私の部下じゃないさ。私の知識も教えたのは君が殺したあの男のみだしね。あの施設も彼が勝手に作ったものさ。』

『……ちよつと待ちなさいよ……。アンタ、最初の話では重要施設って言っていたじゃない。』

『ああ……あれは嘘だ。』

『……なるほど……私が陽介と戦えるか試したわけね。ホント……いい性格してるわ、アンタ。』

『お誉めに預かり光栄だよ。私と君の関係は利害の一致のみだからね。早々に君と他の『新世代』たちとは敵対してもらわないとね……』

『心配性な事で……。 で？何の用よ？』

『……アザート……』

『!?!?!』

ギリと、思わずアリアは持っていた携帯を握り締める。

『…随分と今更な名が出てきたわね。奴は確か、今は牢獄にブチ込まれているんじゃないか？ 将に能力も砕かれて。』

『……不愉快だから、あまりその名前を出さないでもらえないかな…?』

一瞬…本当に一瞬だが、電話ごしの男の声に憎悪の色が宿る。

察しのいいアリアはその事に気付いたが敢えて無視し、話を進める事にする。

『…で？まさかとは思いつけど奴を脱獄でもさせる気？そういう事なら私は手を貸さないわよ。奴と直接会ったら私は自分が何をするか分からないし。』

『そう、だからこそ、この作戦は君に頼むんだよ。』

『……話を聞かせてもらおうわ。』

神速剣は『強さ』を求め、堕ちていく…。
深く濃い闇へと…。

「全く！信じられませんよ!!!こんな騒ぎを起こすなんて!!!」

「まあまあ…、幸いけが人もいなかったのですし不幸中の幸いでは

ないですか。」

学園都市の小学校の校長室　　。

現在、ここには、鼻息荒く、目もつり上がった見事なバーコード禿の中年男性と白髪 of 混じった髪をし、温厚そうな顔に苦笑を浮かべた中年男性　　そして……、

「（バリバリ…）うんうん…、やっぱり、ジャ　プは面白いな
」。

ソファで寝転がりながらポテチを頬張りジャ　プを読んでいる天野零がいた。

「何を寛いでいるんですか！！？貴女の事で話しているんですよ！
？ちゃんと反省しているんですか！？」

バーコードは一気に怒りを吐きだすように怒鳴る。

（ごめんなさい、教頭先生、以後気を付けます。）
「うっさい！！バーコードハゲ！！」

「まさかの暴言！！？」

「しまった！！つい…建前と本音が逆に！」

「き…君ねえ……」（怒）

「まあまあ…、それぐらいでいいではないですか…、教頭先生…。」

「校長先生…しかし……！」

「彼女は皆を護る為に戦ってくれたのですから。今回は大目に見てあげてもいいじゃないですか。」

校長先生はそう言いながら、ポンポンと教頭先生の肩を軽く叩きながら穏やかな笑みをしている。

「ハア…。貴方は甘すぎますよ…。今回は彼女にも怪我がなかったから良かったものの…。いくら力を持っていると言っても、彼女はまだ子供なんですから……」

なんだかんだと規則や規律に厳しいこの教頭だが、このように根っここの部分は子供たちを純粹に心配するいい先生なのだ。

校長はそんな教頭の言葉を聞き、笑みを深めると『今夜飲みに行こう』と肩を叩きながら誘っていた。

そんな光景を尻目に零は ……、

「もしもし？チャージャーメンとカツ井、それから餃子をお願いします。お代はバーコード教頭にツケで」

電話で出前を取っていた……。

「天野零くん！！君って子はあああああ！！！！！！！！」

「お…落ち着きなさい…！！教頭先生！！」

とまあこんな感じで中年二人を振りまわす天野零だった…。

「大丈夫かなあ…、零の姉御…。」

その言葉を漏らしたのは坊主頭の少年・佐藤良太。さとうりょうた 皆からは『リヨ
ータ』と呼ばれている。

「大丈夫だと思うよ…。だって零だもん。」

その言葉に返したのは長い付き合いのリヨカ。

「そうだよね　、零ちゃんだもんね　。」

そう言ったのは栗色の髪をロングにし片方を髪の一房を二つ編みに
した少女・穂先ヒナ。

「…あいつだと…何をしても納得できちまつのがすげえよな…。」

呆れたように言うのは白い髪に野球帽を被った少年・ライル・エル
クサー。

「あれ？そういえば、真白ましろちゃんがないけど休み？」

「私も分からないんだよね　。昨日は一緒に遊んだんだけど、
昨日は元気だったんだけどな　。」

リヨカの問いにヒナは首を傾げている。

（病気で休みならお見舞いに行こう…。）

??????
「

北の海に絶叫が響いた……。

第5話・ 優しさゆえに人は狂う（後書き）

教えて！！リヨカリヨカ！！

リヨカ・ 今回は前回の話で零が不良の拳をまともに受けても大丈夫だった理由を解説しようと思います。

そもそも、人間が体を動かす時には脳から電気信号をその部位に送る事で人は初めて体を動かせるのです。ここで注目すべきは零が雷属性の神血だという事です。雷属性はただ単純に体から電気を生じさせる事ができるだけではなく、体内の生体電気も操ることができるのです。これによって、零は生体電気を操り、筋肉を活発化させる事で体を鋼のようにさせ、不良の拳を止めたという訳です。

リヨカ・ はい、今回はここまでですね。次回は『属性』について解説しようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1409x/>

ようこそ！！大和探偵事務所へ！

2011年12月15日03時45分発行